秋山さやか

JOSHIBI no.178

しっくりはまる瞬間に出会いたい。

地図や布の上に、自らの思いを針と糸とで縫い込む。ほかならぬ自分にとっての"しっくり"くる感覚を求め、自らのリアリティを指先から表出させてきた秋山さやかさん。油絵の筆に代えて針と糸を手にし、創作活動を続けてきた氏の足どりに迫る。

Photo 細川葉子　Text 立古和智

現在手がけている作品の原点となる作品「あるく」を手がけたのは京都の大学に在籍していたとき。ある日、自分の歩いた軌跡と足の向きを、真っ白な紙の上に鉛筆で記してみたらすごくしっくりきたのです。10年以上続けてきた油絵で表現してきたことよりも、はるかにリアリティを感じました。そこから「あるく」をテーマとして、日常生活の中で出会ったものを作品に取り込む試みが始まったのです。その次に真っ白な地図上で同じことを試みたものの、それには全然ドキドキしなかったので、今度は針と糸を手にして縫ってみました。人生最大級の「これだ！」が訪れたのはこのときです。

あの日、針と糸を手にしてからすでに15年。筆を握っていた時間よりも長くなりました。大学に入ったばかりの頃は「油絵こそが王道」と頑なでしたが、実のところ絶対的なものなんて存在しないのですよね。絶対だと信じていたものなんて一瞬で覆ってしまう。学生時代に阪神大震災を経験し、当たり前の日常が転覆したときに、そう実感しました。京都時代に出会った人たちからは、自分が絶対だと信じ切っていた美術に対する姿勢も絶対ではないと思い知らされました。こうして多くの「絶対」が崩れ去るなかで、美大浪人時代に溜め込んだ贅肉のような知識が削がれ、肩の力が抜けたのです。だからこそ、ずっと続けてきた油絵の筆をいったん脇に置き、針と糸を手にできたのでしょう。いずれにしても自分の「絶対」にがんじがらめになって止まるくらいなら1パーセントでも可能性がある方向に進んだほうがいい。何ごとも試す前から辞めてしまったら何も得られませんからね。

私の場合、今は「縫う」を続けていますが、それ以上に大切なことは表現の核の部分。訴えたいことです。それを表現するのに最適な手段が「縫う」ではなくなったら、当然異なる手段を選ぶでしょう。ちなみに私が表現し続けてきたこととは「時間のあしあと」。日々の行動から生まれる軌跡は時間の中から生まれるものですが、それを作品に落とし込みたい。しかし、今それも過渡期を迎えつつあります。というのは、これまでのように地図上に縫い込む必要性が自分の中では薄れつつあるからです。恐らく自分と地図との関係性が変わり、自分にとっての「縫う」の重要性が増しているのでしょう。針と糸で縫うという行為は極めてダイレクトですが、それこそ縫っている瞬間の気持ちや、心のゆらめきを縫い込むことを

もっと大事にしたい。つまるところ、かつて私にとって重要だったのは「場所、時間、自分」でしたが、これが「時間、自分」に変わり、今では「自分」になりつつあるわけです。

振り返ってみると、私の場合「観賞者」以上に「自分」という側面が強いみたいですね。まがりなりにも現代美術を名乗っている以上、世に問いかける社会性も備えているつもりではありますが、突き詰めると自分に行き着きます。もちろん作家には自己中心的なところがあるものでしょうけど、私が口癖のように「しっくりくる」と言っているのは作品を創っているときに私自身がリアリティや実感を追求していることとも関係があって、自分の中での「これだ！」に出会いたい欲求が強いからこそだと思います。作品によっては創っている最中に「これだ！」という実感があることもあれば、完成直後にはしっくりこなくても、時間差でしっくりくる場合もありますね。どちらにしても針と糸を使っての表現は、まだまだ自分の中での答えを出し切れていませんので、当分は続けるつもりです。

これまでは運がいいことに作家として続けてこられたものの、私自身の感覚としては、まだまだ海の中で足をバタつかせながら漂流しているような気分です。それでも創ることに対する本能的な欲求が尽きることはありません。生きている限りは創り続けます。そして自分の人生に変化があれば作品も変化するし、逆に作品の変化に影響されて人生が変わることもあるはず。こんな言い方をするとずいぶん格好いいけれど、きっと私は作品とともに、これからもずっと生きていくのでしょうね。

秋山さやか

美術作家。1971年、兵庫県生まれ。2001年3月、女子美術大学美術研究科修士課程修了。2000年に「フィリップモリスアートアワード2000」を、2001年に「ダイムラー・クライスラーグループ アート・スコープ2001」を受賞したのを機に本格的な作家活動を開始。国内外のさまざまな土地を訪れ、その土地と自分との関係性を地図上などに針と糸を使って綴る作品で知られる。国内屈指の現代美術コレクター、高橋龍太郎が持つ約2000点の作品から選りすぐりのものが並ぶ「マインドフルネス！　高橋コレクション展 決定版2014」(2014年4月12日～ 6月8日／名古屋市美術館) に参加。

(上 4点)
「あるく　私の生活形　東京駅～相模大野～東京駅～日本橋～東京駅
2012年7月19日　7月25日, 26日, 27日, 30日, 8月8日, 13日　8月22日～ 9月7日」
素材：ししゅう糸、めん糸、毛糸、ポリエステル布、リボン、ひも、スパンコール、ボタン、シール、ご当地ストラップ、歯の詰めもの、定期券、切符、レシート、館長の文字、赤レンガのかけら、東京駅のガイドブックやパンフレットやメモ書きの切りぬき、駅弁やテイクアウトや食堂の食べ物や飲み物を包んでいた切れはし、などなど…
東京駅の周りと相模大野で見つけたもの・ポリエステル布に昇華プリント
サイズ：約1m50cm角と36cm角の八角形×高さ約95cm
制作年：2012年

(右)
制作風景　2013年4月5日・横須賀美術館応接室
「あるく 私の生活形　鴨居2丁目～観音崎～馬堀海岸～堀ノ内～浦賀～鴨居
2013年3月15日～ 4月11日　4月26日07時24分～ 08時47分」

作品撮影：Hideto NAGATSUKA

表紙撮影協力：マップマーケティング株式会社

「女子美アートギャラリー上海は、自由な創作を支える場となるでしょう」

北川智昭（豊田市美術館学芸員）

女子美を海外アートシーンへ紹介する情報発信拠点として、「女子美アートギャラリー上海」が、2013年本格始動した。将来国際的な活躍が期待される在学生・卒業生の展覧会開催などのキャリアバックアップを担うギャラリーのさまざまな可能性について、キュレーターの北川智昭氏と本学の大森悟准教授にお話をうかがった。

Photo 村上圭一　Text 土谷真喜子

ギャラリーが開設された「上海M50」は、蘇州河沿いの上海市の中心地にあるアートの発信地ですが、上海での大森先生の個展のキュレーションをなさって、どのようなことを感じましたか？

北川「昨年夏の大森さんの作品は、上海の海をイメージしたもので、測量用水平器の緑色のレーザー光線を用いたインスタレーションです。現地の海をリサーチし、材料を集め、真夏の上海で集中して創作活動を行いました。彼の作品において生み出された〝線〟は、まさに絵の起源を象徴するものです。表現において、自分が描きたいと思った希望と実際に表現された作品の間には、奇妙なズレが残っていると思います。彼の作品からはそのことを考えさせられます。女子美アートギャラリー上海の第一回展にふさわしい作品だったと思います」

大森先生は、プレオープンの時からギャラリーの開設に関わってこられましたが、上海で実際にレジデンス制作をされていかがでしたか？

『静水の際 上海』　制作年・2013　素材・作品に使用した素材や機材は、全て現地で調達しました。梱包材、レーザーライト（水平器）、扇風機、鏡、木製の椅子

大森「今回、準備期間が短い中で、北川さんにキュレーションをして頂き、本当に感謝しています。海外での展示ということでいろいろな発見がありました。運搬費用のことなどを考慮しなければならず、展示の素材を検討する段階から、私のアトリエに来ていただきました。〝プチプチ®〟という梱包材をスクリーンとして使用するということになり、川上産業株式会社にご協力をいただけたことも非常に幸運だったと思います。上海では、ローカルな専門店で、しかも個人商店が多く、材料の調達には苦労しました。日本ではあたりまえのことが通用しない。自分の中で眠っていた部分がゆり起こされるような体験をすることができたことは大きな収穫でした。こういうプロセスを経験して作品をつくることが重要なのだと思います」

上海という場所の意義はどのよう

大森 悟（写真 左）

1969年茨城生まれ。1999東京藝術大学大学院後期博士課程（油画）修了。2001年から2005年まで福井大学教育地域科学部助教授。同年より女子美術大学芸術学部美術学科洋画専攻准教授。コバヤシ画廊（2000年2001年2004年2009年／東京銀座）、ギャラリー58（2008年2010年2011年2013年／東京銀座）、ギャラリーとわーる（2008年2009年2010年／福岡天神）、E&Cギャラリー（2011年／福井）など。

北川智昭（写真 右）

東京藝術大学油画専攻卒業後、OAメーカー・デザイン研究所勤務を経て、1994年豊田市美術館開設準備室勤務。1995年から同館学芸員。主な展覧会に「トニー・クラッグ」(1997年)、「イケムラレイコ　“地平線を越えて”」(2000年)、「ダニエル・ビュレン　移行｜場/作品」(2003年)、「河原温　意識、瞑想、丘の上の目撃者」(2005年／国際巡回展)、「ベリー ベリー ヒューマン」(2005年／共同企画)等。最近では「カルベ・ディエム 花として今日を生きる」(2012年)がある。現・豊田市美術館学芸担当長、愛知県立芸術大学非常勤講師。女子美術大学では2010年から2011年まで非常勤講師（プロダクトデザイン史）

なものだと思われますか？

北川「日本の美術大学が海外に拠点を置くということは大変おもしろい試みだと思います。ただし、目的意識を設定してしまうと、何かをつくるときにマイナスになってしまうのではないでしょうか。そういうものを決めずに運営していくことが健康的だと思っています。学生にとっては行くだけでも楽しいと思うし、上海で発表されている作家の作品を見てもいい、いろんなかたちがあっていい。だからフォーマットを決めないことが重要かもしれないですね。やはり学生時代は、自由に暴れられる場があったほうがいい。日本の中にいると、フォーマルな手続きがあって、それに乗らなければいけないような気持ちになってしまう。それとは別に、上海のアートギャラリーが自由な創作を支える場になるでしょう。日本の外側に行くことで、時代や場所に左右されない本当の表現力を身につけて欲しいですね」

今後、このギャラリーは、どんなふうに運営されていくのでしょうか？

大森「今は企画の段階ですが、今回の私が行った方法は1回限りで、また違うやり方を模索してくことが大切だと思います。北川さんがおっしゃるように、決めないということが、かなり重要になっていると思います。先入観のない自由な状態の中で、創作活動をすることはとても重要です。生き物として感じる力とか人間力というものが、アーティストの生命線なのだと思います。上海は、そのことを体験できるチャンスにしたいですね」

北川「日本でつくった作品をただ運んで発表するということでは、意味がないと思います。美大で何を学ぶか、アカデミーとしての役割とは何かを考える必要があります。美術を通じて、生き方や人生、哲学を学ぶのだと思います。自分の内側を見ること、そういう時間が今の学生には少ないと思います。その部分をこのギャラリーの活動を通じて育てていけると良いのではないでしょうか」

女子美アートギャラリー上海 展覧会情報

展覧会名	高山真衣・東麻奈美 2人展
会期	2014年3月29日[土]ー5月11日[日]
時間	11:00ー17:00
休館日	月曜日
会場	Joshibi Art Gallery 200060中国上海市莫干山路50号22号楼102室
問合せ先	企画・運営　株式会社アイシス 042-778-6111(内線2218)

豊田市美術館 展覧会情報

展覧会名	荒木経惟　往生写集――顔・空景・道
会期	2014年4月22日[火]ー6月29日[日]
休館日	月曜日（5月5日は開館）
主催	豊田市美術館　テレビ朝日　メ～テレ
共催	朝日新聞社
協力	一色事務所　写真弘社
問合せ先	豊田市美術館 〒471-0034　愛知県豊田市小坂本町8-5-1 Tel.0565-34-6610

文学、アニメーションの世界で、今も生き続けている矢野綾子さんという先輩。

昨年公開された宮崎駿監督のアニメーション映画作品『風立ちぬ』には、主人公が愛する里美菜穂子というヒロインが登場している。避暑地の草原でキャンバスに向うその姿には、ひとりの実在のモデルがいる。矢野綾子さん、私たちの先輩だ。

取材・文　土谷真喜子

矢野綾子 肖像（堀辰雄文学記念館所蔵資料）

『赤い屋根の家』 矢野綾子、油絵（堀辰雄文学記念館所蔵資料）

映画に登場する里美菜穂子という人物は、作家堀辰雄の小説『風立ちぬ』『美しい村』の節子という女性と、小説『菜穂子』の主人公に、その姿を重ねることができる。節子は、女子美の卒業生の矢野綾子さんがモデルと言われている。堀辰雄の婚約者であった彼女は、24歳という若さで結核によって亡くなってしまったが、その生き様や言葉は彼の小説の中で語りつがれている。長野県軽井沢にある「堀辰雄文学記念館」には、矢野綾子さんの写真とともに、彼女が描いた油絵が保存されている。菜穂子が映画の中で潔く緑色の絵の具で描いていたまさにその絵を彷彿させる作品だった。

彼女は明治44（1911）年に愛媛県今治市に生まれた。幼い頃に両親をなくし、叔父である矢野透氏の養女となった。広島の広島女学校（現広島女学院）高等女学部を卒業後、成績優秀で美術の分野で学ぶことを希望し、女子美術大学の前身である女子美術専門学校に昭和4年4月から昭和7年3月まで在籍していた。

女子美を卒業した翌年の夏、綾子さんは療養のために軽井沢に滞在していた。そこで堀辰雄と出会い合い、婚約をする。小説『風立ちぬ』の冒頭にあるポール・ヴァレリーの詩『海辺の墓地』の一節「風立ちぬ、いざ生きめやも」という言葉は、映画の中でもキーワードとなるものであるが、ふたりの中で「生きる」ということを思う大切な言葉であったのだろう。

矢野綾子という人間の命は失われてしまったが、彼女の思いは小説の中に受け継がれ、また宮崎駿監督のアニメーション映画の中に受け継がれている。まさに女子美の歴史に刻まれている「人生は短し、芸術は永し」という言葉が表現を変えながら次世代へと受け継がれているのである。時代が変わり、さまざまなアート表現を学ぶことができる今、私たちは先人達の思いを受けとめ、自分自身の作品を生み出すことを考えていきたいと思う。

女子美スタイル２０１３『超少女』、東京都美術館にて華やかに開催！

３月２日から８日にわたり、上野の東京都美術館にて「女子美スタイル２０１３『超少女（ＵＬＴＲＡ ＧＩＲＬ）』」を開催しました。今回で８回目を迎える「女子美スタイル」。今年も、大学院、芸術学部、短期大学部の全卒業・修了制作作品の中から選抜された作品と本学付属高等学校の卒業制作の全作品が展示されました。上野という芸術の地で、女子美生の作品が一堂に会する大規模な展覧会となりました。

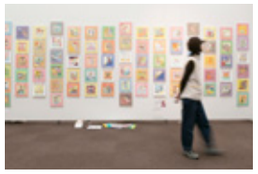
今回の女子美スタイルのテーマは『超少女』です。

これは、１９８６年８月発行美術雑誌「美術手帖」にて『超少女』が特集されたことから由来しています。女性でもなく、男性でもない少女を超越した自由なジェンダーという意味も含む『超少女』。女子大であり美大である特異な環境のもとに制作された女子美生の作品は、まさに『超少女』なのです。

女子美スタイルは、芸術学部アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域の日沼禎子准教授がディレクションし、廣田尚子教授、福士朋子准教授、八木なぎさ准教授のキュレーションで、作品が選抜され、会場を彩りました。

会場には、洋画、日本画、立体作品、インスタレーション、映像作品、テキスタイル、ガラスなど幅広い表現領域の作品で埋め尽くされ、作品は女子美らしいみずみずしいものばかり。会場では、観賞者からの質問に対して作品コンセプトを丁寧に伝える学生や、会場の天井から吊り下がる数々のテキスタイルワークに見とれる人々など、おおいに賑わいました。

また、第一線で活躍しているギャラリストやクリエーターをゲスト審査員に迎え、展示された全作品の中から、虹色の賞の名前がついた「Joshibi Rainbow Award」を選出。アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域３年生有志の協力によるオープニングパーティーも開催。「Joshibi Rainbow Award」の受賞者発表の場面では審査員が直接、受賞者名を銀色の賞状に書いて発表、一斉に白い手袋をつけ、名前を書き出す審査員の姿に、会場はわっと盛り上がりました。きらきらと輝く賞状は銀色の折り紙のような素材でできたペストリー型のもの。会期中には講演会「超少女は今どこに?」を開催。司会は日沼禎子准教授、ゲストに松井智惠さん、松尾惠さん、富田有紀子さんを迎え、かつての『超少女』のお話に共感する女子美生の姿が見られました。



Red Prize
五十嵐久枝賞
(デザイナー)

『かぜのほたる』
岡見風子
芸術学部 デザイン・工芸学科
プロダクトデザイン専攻

Orange Prize
映里賞
(写真家)

『TOWER』
小柴薫理
大学院美術研究科 修士課程
美術専攻 洋画研究領域

Yellow Prize
工藤麻紀子賞
(画家)

『願掛け』
山﨑奏絵
芸術学部 美術学科 洋画専攻

Blue Prize
山本裕子賞
(コンテンポラリーアートギャラリー
山本現代ディレクター)

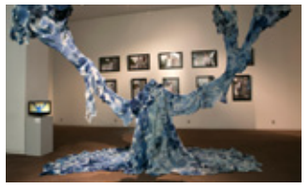
『写真』
平松るい
短期大学部 造形学科 デザインコース

Green Prize
島峰 藍賞
(東京2020オリンピック・パラリンピック
招致ロゴマークデザイン)

『phenomenon』
湯浅千紘
芸術学部 美術学科 洋画専攻

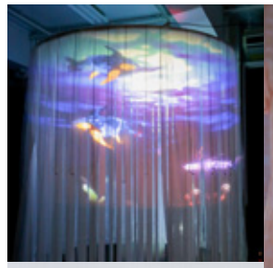
Indigo Prize
横山勝樹賞
(建築家 / 女子美術大学学長)

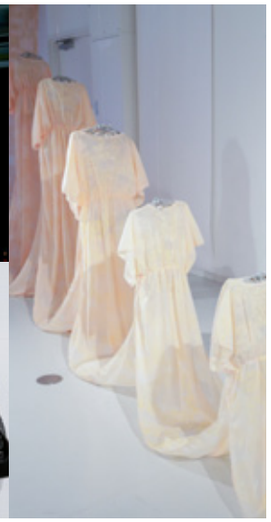
『TIME TABLE』
芝愛弥葉
芸術学部 美術学科 洋画専攻

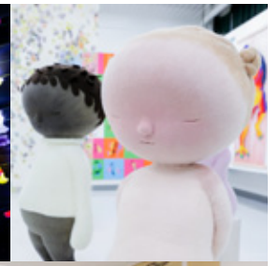


Violet Prize
日沼禎子賞
(「ARTizan」プログラムディレクター /
アートNPOリンク理事/女子美術大学准教授)

『Identity』
趙敏熙
芸術学部 アート・デザイン表現学科
ファッションテキスタイル表現領域







2013年度卒業制作展／修了制作展、開催

3月13日から16日、相模原と杉並の両キャンパスで芸術学部・短期大学部の2013年度卒業制作展／修了制作展が開催されました。開催期間最終日には、芸術表象専攻優秀卒業研究および大学院修士論文発表会が相模原キャンパスで開催。学生生活の集大成である卒業制作や、同期間に開催している大学院の修了制作を鑑賞するため、多くの来場者がキャンパスを訪れました。

入選作品

準朝日広告賞受賞作品

いろいろなメロスと、共感できるクレヨン。ふたつの広告で受賞

2013年7月、第61回朝日広告賞が決定。「一般公募の部」で本学芸術学部デザイン学科ヴィジュアルデザインコース2010年卒業、現在株式会社電通に勤務の柴谷麻以さんの手掛けた新潮社の新潮文庫と、小学館の小学一年生の広告作品が準朝日広告賞と、入選をダブル受賞しました。柴谷さんによると、準朝日広告賞を受賞した新潮文庫の広告作品は「本というだけで敷居が高くなりそうなところをなくして、マンガとは違う文庫本が持つ楽しさを伝えたかった」とのこと。そのため誰もがいちどは読んだことのある小説を題材に。「文庫本の表紙に描かれているのは、同僚や先輩、友だちに描いてもらった〝その人がイメージする登場人物〟なんです」。読み手によって小説のイメージも変わるという当たり前のことを、らく書きのようなイラストで表現したことは、審査員の方々からも「表紙にいたずら書きをしてちゃかす感じや漫画っぽさが、文庫を読みたいという気持ちをくすぐると思う」「文庫の本質を、居丈高になるわけでもなく上手に伝えている」との高い評価を得ての受賞となりました。

もうひとつの小学一年生の広告作品は、クレヨンの一本一本の色の名前に注目です。「小学生になった途端、世界が広がる感じや、なにもかも新鮮に感じるその気持ちをクレヨンの色名にこめてみました」。柴谷さんは「自分なりに感じたものの色を表現することで、いろいろな方々の共感を得られる作品になりました」と話してくれました。

今回の受賞にあたり、会社の上司や同僚をはじめ周囲の人たちが喜んでくれたことが一番嬉しかった、と柴谷さん。「今までは楽しく作ることが大切だと思っていましたが、これからはいろいろな人に喜んでもらえるようなものを作っていきたいです」と話していました。

MESSAGE 01

新入生に向けて

学校法人女子美術大学
理事長　大村 智

本学園は、114年前、横井玉子、佐藤志津という二名の女性を中心に創立されました。まだ女性の社会進出がままならない時代に、女子に美術教育を施し、専門家として積極的に社会参画する女性を養成するという理念を掲げた両名は、まさしく美術の力を持って社会に貢献した人材でありました。私は、人生において最も大事なことは、自己の個性と創造性をもって、社会に貢献することだと考えています。本学園で学ぶことによって、皆さんの個性が花開き、創造力が養われ、その力を使って社会に貢献できる姿を皆さん自身が描ければと思います。創立者の両名をはじめとする本学園の先輩の生き方を学びながら、自身の人生を素晴らしいものにすべく学生生活を送られることを期待します。

学長　横山 勝樹

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。私たち―「女子美」は、新しい仲間となったみなさんを心から歓迎しています。
女子美術大学・女子美術大学短期大学部の建学の精神は、「芸術による女性の自立」、「女性の社会的地位の向上」、「専門の技術家・美術教師の養成」です。女子美の先生たちは、この言葉の意味を考えながら、美術とデザイン、そして関連する学問の世界で日々制作と研究を実践している人々です。みなさんの先輩たちも、先生たちとともに114年間この精神を受け継いできました。みなさんもこの言葉の意味をぜひ心に留めて、これからの大学生活を送ってください。
21世紀は、地球環境・世界平和の問題など、難しい問題が山積している時代です。それゆえに日々の制作と研究を通して、女子美の建学の精神を世界に発信していくことが、私たち、つまりみなさんの使命です。女子美でたくさんの仲間を見つけてください。そしてみなさんの活躍に期待をしています。

短期大学部部長
小林 信恵

芸術学部長
橋本 弘安

大学院美術研究科長
上葛 明広

MESSAGE 02

新任教員からみなさんへ

熊谷宗一
芸術学部 美術学科
洋画専攻　教授

自分の足元に壮大に広がる宇宙、その中を小さなワクワクを一つ一つ拾い集めながら歩んで行く―。表現に携わる人たちの多くは、そんな風に自己の内なる世界へと日々旅をしているのではないでしょうか。でも人や言葉そして作品との出会いが、時に自分を外の世界へと大きく誘い出してくれる。僕にもそんな出会いや旅が沢山ありました。学校とはそんな出会いの場です。沢山ワクワクして、内へ外へと沢山旅をして欲しい。そう思うのです。

神奈川県生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了。O氏記念賞。ウィーン応用美術大学（政府給費留学生）卒業。Magister。

野又 穫
芸術学部 デザイン・工芸学科
ヴィジュアルデザイン専攻　教授

「無から有を創り出す喜び」。誰もが自然に持っている感情ですが、とりわけ美術を志す者にとっては、創作の源と言って良いでしょう。私自身もスケッチブックの真っ白なページを開く時、今でも新しい表現への期待と呼べるような何かが沸き起こります。美術の現場でふっと感じる「やってみたい」、「面白そう」という気持ちを大切に、少し背伸びをするつもりで、知識、技術、感性を磨いてください。きっと今までとは違う自分を発見出来るはずです。

1979年東京藝術大学美術学部デザイン科卒。マッキャンエリクソン博報堂にて84年までアートディレクター。86年以降、想像上の建造物を描くアーティストとして活動。

佐藤紀子
芸術学部 共通専門
助教

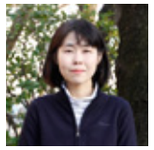
学部を卒業して以来、18年ぶりに母校に戻って来ました。キャンパスは、棟が増えて少し景色が変わりましたが、女子美生の雰囲気をまた肌で感じられることを嬉しく思います。人間のクオリティ・オブ・ライフに美術がどのように関わりあっていけるのか、学生の皆さんと一緒に考えていきたいと思います。先輩の先生にお力をお借りしながら、学生の教育や指導も頑張って参りたいと思いますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

1974年茨城県生まれ。本学芸術学部絵画科日本画専攻卒業。東京芸術大学大学院美術研究科造形理論（図学）修了。同大学院美術研究科美術専攻芸術学研究領域（美術教育）修了。美術博士。日本図学会会員。

稲田亜紀子
芸術学部 美術学科
日本画専攻　助教

この春、新潟から上京しました。昨年、久しぶりに訪れた相模原から眺めた丹沢が美しく、雪国にはない空の高さを実感しました。その空にくっきりと建つ校舎がまだ少し、よそよそしく見える日がありますが、この感じを忘れないでいようと思ったりもします。よろしくお願いします。

1971年新潟県生まれ。女子美術大学大学院美術研究科修士課程美術専攻日本画研究領域修了(97)　第38回日展特選(06)　日展会友



林 佐和子
短期大学部 造形学科
美術コース　助教

小さい頃から絵を描いたり物を作るのが好きでした。好きなことを学びたいと漠然と思い女子美の門をくぐり、学んだ日々は今の自分につながっています。ここで出会えた先生、友だち、いろいろな出来事、そして彫刻。学生時代は人生の通過点です。でも、そこで見つけたものたちとは、その後ずっと一緒に歩むことができます。大好きな事にきっと巡り合える“場”女子美キャンパスライフを一緒に楽しみましょう！

1972年愛知県生まれ。女子美術短期大学専攻科彫塑修了、徳島大学総合科学部人間社会学科卒業、筑波大学大学院芸術研究科彫塑専攻修了。二紀会会員。第51回 二紀展優賞、第2回 あさご芸術の森大賞展 準大賞 など。

退職された先生方

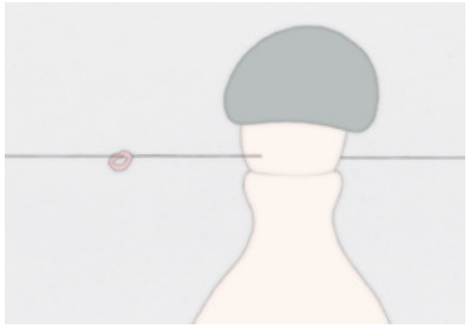
大学院	美術研究科	デザイン専攻 メディア研究領域	教授	為ヶ谷秀一
芸術学部	美術学科	洋画専攻	教授	中村一美
		日本画専攻	教授	広瀬きよみ
		立体アート専攻	教授	津田裕子
		立体アート専攻	教授	渡辺治美
芸術学部	デザイン・工芸学科	ヴィジュアルデザイン専攻	教授	奥村馭正
		環境デザイン専攻	教授	中嶋猛夫
	アート・デザイン表現学科	メディア表現領域	教授	河邑厚徳
		ファッションテキスタイル表現領域	教授	小倉文子
	芸術学科		教授	面出和子
	基礎教養		教授	村山久美子
短期大学部	造形学科	美術コース	教授	柏原花子
			教授	吉武研司

NEWS & TOPICS

01 | 蜷川幸雄×蜷川実花 特別公開講座で初対談

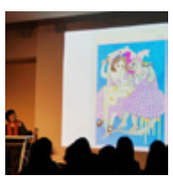
演出家である本学アート・デザイン表現学科ファッションテキスタイル表現領域客員教授 蜷川幸雄先生と、写真家、映画監督として活躍されている蜷川実花さんの対談が12月18日、杉並キャンパスにて行われました。この対談はアート・デザイン表現学科が主催している特別公開講座として実現したもので、親子での対談は今回が初めて。「ふたりでこうやって並ぶのは照れ臭くて、緊張しています。仲が良い親子だけど、このような機会がないとモノづくりについて考えを述べたり、話し合うことはできないと思います」と実花さん。2014年は11本舞台をやりたいという幸雄先生に対し実花さんは「どんな若い働き盛りの私たちでもそんなとんでもないスケジュールは組まないです。そうやって走り続けている父がいるということはプラスでしかないです」と誇らしい表情で話されていました。その後の質疑応答の時間ではたくさんの学生が進んで質問をし、蜷川先生からとても考え深いお答えをいただくことができました。この貴重な90分は学生達にとって刺激的な時間となったことでしょう。

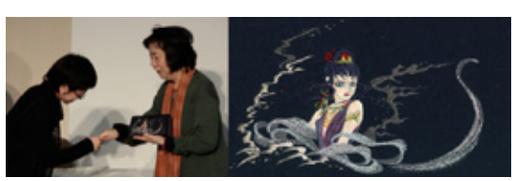
02 | 水尻自子監督作品『かまくら』、ベルリンの観衆を魅了



2月7日から開催されたベルリン国際映画祭。世界三大映画祭のひとつとして有名なこのイベントの最高賞「金熊賞」を競うコンペティション部門の短編映画作品に、本学芸術学部デザイン学科卒業生の水尻自子監督の『かまくら』がノミネートされました。2012年、『布団』で第14回広島国際アニメーションフェスティバルで木下蓮三賞他を受賞している水尻監督、今後の活動から目が離せません。

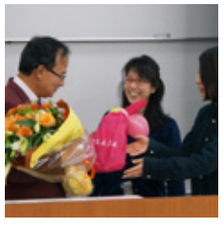
03 | 萩尾望都先生による特別公開講座開講！





12月9日、杉並キャンパスにてアート・デザイン表現学科主催の特別公開講座「萩尾望都SF漫画と未来の世界」が開催されました。これは少女漫画の巨匠であり本学同学科メディア表現領域客員教授 萩尾望都先生によるスペシャル講座です。講座では萩尾先生自身による作品解説、上京した頃の話、制作秘話などの貴重なお話が満載。萩尾先生から女子美生へ「自分の好きなものを抱きしめつづけていれば、辛いことがあっても、それが自分の励みになる。だから頑張って」と、応援メッセージをいただきました。講座の最後には萩尾先生が昨年の春の叙勲で紫綬褒章を受章されたお祝いとして、デザイン・工芸学科工芸専攻の青谷徳子助手が制作した「百億の昼と千億の夜」の主人公、阿修羅を刺繍したバックをお贈りしました。

04 | 北川フラム先生 最終講義、熱く開催



2013年度で本学を退職されることになった大学院客員教授、北川フラム先生。最終講義が1月22日、相模原キャンパスにて行われました。北川先生は2005年度より本学で教鞭をとられ、芸術学部芸術学科および芸術表象専攻、大学院芸術文化専攻教授として、また共通科目でも多くの学生を指導いただきました。最終講義は、芸術表象専攻が実施している「芸術表象論特講 オープン・レクチャー」の第19回目の講師としてお招きするかたちを取りました。貴重な講義を聴けるとあって、多くの在学生や教員、職員の方々の他、この日のために駆けつけた卒業生や修了生の姿も見られました。講義題目は「日本列島の文化と現代美術」。北川先生の活動の原点と、日本文化との深い関わりについて「越後妻有アートトリエンナーレ」の事例を中心にお話いただきました。授業の最後には、大学院生から花束とプレゼントを贈呈。トレードマークのコートに帽子の後ろ姿とともに、先生から学んだ多くの言葉は女子美生の心に残ることでしょう。北川フラム先生、10年間ありがとうございました。

韓国の誠信女子大学校で、本学ファッションテキスタイル表現領域教授、小倉文子先生による講演会が開催されました。講演タイトルは「人とつながる・社会とつながる」。同領域が取り組んできた地域連携や企業連携、教育連携などの活動を中心に語られた講演会、およそ150名ほどの衣類学科の学生が聴講し活発な質疑応答が交わされました。また、誠信女子大学校 雲庭キャンパスでは「アジア高校生アートアワード2013」の巡回展が開催。小倉先生は、誠信女子大学校と上海交通大学海派文化研究所と本学による三校共催アワードの作品展覧会やキャンパスを見学した他、シム・ファジン総長をはじめ美術学科や衣類学科の教員の方々と交流を深めました。

05

小倉文子教授、女子美の連携プロジェクトについて講演

06

上海に新たな文化交流のプラットホームがオープン

2013年に、上海交通大学に設置された「中日(国際) 美術教育研究センター」。これは上海交通大学と女子美術大学が協力して国際文化交流のさらなる発展を目指し、中日芸術文化交流のプラットホームとして設置したものです。1月17日、そのセンターの看板除幕式が杉並キャンパスにて執り行われました。上海交通大学学長代理 紀凱風様、上海交通大学海派文化研究所常務副所長 詹仁左様、上海交通大学国際協力交流処・副処長(日韓担当) 蔡玉平様がお越しになり、本学からは大村智理事長、横山勝樹学長、中国代表事務所上葛明広所長が出席し、除幕式は無事終了。ひきつづき110周年記念ホールで「日中国際交流書画展 女子美術大学・上海交通大学 第2回 百年丹青縁展」のオープニングが開催されました。展覧会場内では、今回の展覧会の注目イベントである「上海交通大学の詹仁左先生、呉一平先生、王琦先生の3名の先生方による作画実演」が実施され、その一挙手一投足にみな見入っていました。

07

美術の力を結集、文化の柱となるべき存在へ

12月16日に、東京藝術大学にて『美術系大学連絡協議会』締結式が行われ、美術系の六大学が美術文化の発展とその教育普及を目的として、相互の連絡協議を促進するための美術系大学連絡協議会が発足しました。六大学が連携を図り、社会に対しより多くの発信機会を持つべきであると確認され、この協議会の発足にいたりました。今後は、美術・文化の発展および教育普及を目的とする学術研究や共同事業、初等中等教育における美術教育への支援、美術文化振興についての政策提言及び関連機関への要請などを共同で実施。またさまざまな文化施設とも連携し、2020年の東京オリンピックに向けて発言力強化に努めていきます。

■参加校
女子美術大学、多摩美術大学、東京藝術大学美術学部・大学院映像研究科、東京造形大学、日本大学芸術学部、武蔵野美術大学

08

被災した町の復興に女子美生が夢を描く

本学名誉教授の齊藤研先生より「被災した福島県相馬郡新地町の『磯山聖ヨハネ教会』を含めた町の復興構想に、女子美生の創造する力を借りたい」と申し出があり、大学院生から付属中学生までのメンバーで構成される「オール女子美」でプロジェクトチームを作りました。チームで長期に渡りリサーチ作業やブレストによる意見交換、ワークショップで模型製作等を実施。横山勝樹学長や小川正明付属校長も参加して現地を訪問、教会跡地では黙祷を捧げました。教会建築プランや"教会が町の文化拠点"となるアイデアを、教会関係者や役場の方々にプレゼンテーション。このプロジェクトの道のりは長く、女子美がその一端を担えれば幸いです。

09

アート・デザイン表現学科領域を超えた「プレゼン大会」

杉並キャンパス7201教室に集結し、同学年およそ180名の前で、各チームで取り組んだ課題を発表するプレゼンテーション大会。完成した作品を単に紹介するだけではなく、自分たちが考えた「テーマの真意」や作品コンセプトの「根底にあるもの」、そしてその表現方法などについても堂々と発表していました。中には会場全体を劇場化して音や光を用いた演出も。1年生の発表の際、プレゼンを見ていた教員から「思っていることが形に出来ないジレンマがあるはず、今後もチャレンジを続けて表現の幅を広げてほしい」とエールを送る場面もありました。

16 平成25年度 卒業制作賞・優秀作品賞 等 受賞者

加藤成之記念賞

大学院

魏 世婉	美術研究科修士課程デザイン専攻環境造形研究領域

芸術学部

岩本麻由	美術学科洋画専攻
慶野智子	美術学科日本画専攻
山岸かのん	美術学科立体アート専攻
赤堀智美	美術学科芸術表象専攻
池尾麻里	デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻
木田弓絵	デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻
北地那奈	デザイン・工芸学科環境デザイン専攻
森田安梨沙	デザイン・工芸学科工芸専攻
伊東すみれ	アート・デザイン表現学科メディア表現領域
小林穂南	アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域
関 みのり	アート・デザイン表現学科ﾌｧｯｼｮﾝﾃｷｽﾀｲﾙ表現領域
辻 真木子	アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域

短期大学部

鶴田紗弓	造形学科デザインコース 創造デザイン（ﾃｷｽﾀｲﾙ）
山本優子	専攻科造形専攻 美術コース（彫塑）

福沢一郎賞

大学院

室井麻未	美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域
立花裕佳子	美術研究科修士課程美術専攻版画研究領域

大久保婦久子賞

大学院

朝倉優佳	美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域
関口さおり	美術研究科修士課程美術専攻日本画研究領域
峰山 花	美術研究科修士課程美術専攻版画研究領域
石井文音	美術研究科修士課程美術専攻立体芸術研究領域
横井理子	美術研究科修士課程デザイン専攻ﾌｧｯｼｮﾝ造形研究領域
鈴木 雅	美術研究科修士課程デザイン専攻環境造形研究領域

女子美術大学美術館収蔵作品賞

該当者なし

女子美術大学美術館賞

大学院

室井麻未	美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域

芸術学部

岩本麻由	美術学科洋画専攻
上野友子	美術学科日本画専攻
寺田彩乃	美術学科立体アート専攻
駒﨑友海	デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻
岡見風子	デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻
德永亜弥子	デザイン・工芸学科環境デザイン専攻
藤原綾子	デザイン・工芸学科工芸専攻
宮坂莉菜	アート・デザイン表現学科メディア表現領域
新井貴子	アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域
趙 敏熙	アート・デザイン表現学科ﾌｧｯｼｮﾝﾃｷｽﾀｲﾙ表現領域

短期大学部

加藤未里	造形学科美術コース（彫塑）

卒業制作賞

芸術学部

岩本麻由	美術学科洋画専攻
栗田ふみか	美術学科洋画専攻
長谷川弥生	美術学科洋画専攻
小原まりこ	美術学科日本画専攻
川原めい	美術学科立体アート専攻
髙倉美里	デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻
山田一穂	デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻
豊泉奈々子	デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻
イ ジュヒ	デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻
芳賀咲歩	デザイン・工芸学科環境デザイン専攻
飯田桜子	デザイン・工芸学科工芸専攻
高野夏美	アート・デザイン表現学科メディア表現領域
宮坂莉菜	アート・デザイン表現学科メディア表現領域
新井貴子	アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域
趙 敏熙	アート・デザイン表現学科ﾌｧｯｼｮﾝﾃｷｽﾀｲﾙ表現領域

卒業研究賞

芸術学部

赤堀智美	美術学科芸術表象専攻
角 亜維子	アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域

優秀研究賞

芸術学部

森 久恵	美術学科芸術表象専攻
望月明衣	アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域

優秀作品賞

芸術学部

上田聖美	絵画学科洋画専攻
小山 桃	美術学科洋画専攻
佐野友音	美術学科洋画専攻
安田知未	美術学科洋画専攻
山本眞紀子	美術学科洋画専攻
中村明音	美術学科日本画専攻
矢嶋美希	美術学科日本画専攻
横手美紀	美術学科日本画専攻
上田 茜	美術学科立体アート専攻
中島由佳	美術学科立体アート専攻
池尾麻里	デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻
大多和 琴	デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻
岡山史緒	デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻
須原花梨	デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻
妹尾 杏	デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻
永坂みつき	デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻
吉村果夏	デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻
松本来夢	デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻
田邊若菜	デザイン・工芸学科環境デザイン専攻
鳥潟美和子	デザイン・工芸学科工芸専攻
町田瑞稀	デザイン・工芸学科工芸専攻
矢吹 萌	デザイン・工芸学科工芸専攻
鈴木柚璃亜	アート・デザイン表現学科メディア表現領域
須藤夏実	アート・デザイン表現学科メディア表現領域
髙田万里子	アート・デザイン表現学科メディア表現領域
松浦 睦	アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域
渡邊美寿貴	アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域
髙木沙綺	アート・デザイン表現学科ﾌｧｯｼｮﾝﾃｷｽﾀｲﾙ表現領域
永瀬由衣	アート・デザイン表現学科ﾌｧｯｼｮﾝﾃｷｽﾀｲﾙ表現領域

卒業制作賞

短期大学部 造形学科

中田さつき	美術コース（絵画）
加藤未里	美術コース（彫塑）
後藤依琳	デザインコース 情報デザイン
佐々木香奈	デザインコース 情報デザイン
平松るい	デザインコース 創造デザイン（メディア）
羽根田亜子	デザインコース 創造デザイン（ﾃｷｽﾀｲﾙ）
三橋舞子	デザインコース 創造デザイン（スペース）

優秀作品賞

短期大学部 造形学科

池上摩耶	美術コース（絵画）
野口真悠子	美術コース（絵画）
山田ニナ	美術コース（絵画）
川崎真子	デザインコース 情報デザイン
小泉彩夏	デザインコース 情報デザイン
佐藤未遊	デザインコース 情報デザイン
來海万由	デザインコース 創造デザイン（メディア）
立石りえ	デザインコース 創造デザイン（ﾃｷｽﾀｲﾙ）

短期大学部 専攻科 造形専攻

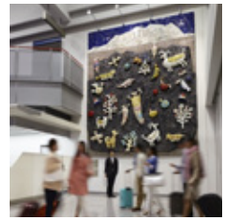
林 良実	美術コース（彫塑）
矢島朱花	デザインコース 創造デザイン（ﾃｷｽﾀｲﾙ）
竹田有里	デザインコース 創造デザイン（ﾃｷｽﾀｲﾙ）
近藤ちひろ	デザインコース 創造デザイン（スペース）

12 ひばりが緑輝く相模原市を見守るワッペン

相模原市では「さがみはら防災スクール」を開講し、防災知識の普及啓発を進める「さがみはら防災マイスター」の育成に取り組んでいます。2月に誕生した初の「さがみはら防災マイスター」を認証するマイスターワッペンのデザインを、本学ヴィジュアルデザイン専攻3年の山手澄香さんが担当。認証式では、防災マイスターに相模原市の色である緑と、市の鳥のひばりをイメージしたワッペンが交付されました。

11 見ているだけで飛び立つ気分、福士朋子先生のアートワーク

「楽しい成田空港をつくろう！」とのテーマのもと、成田国際空港株式会社の若手社員が中心となり進めている「成田空港オアシスプロジェクト」。このプロジェクトの一環として成田空港第1ターミナル北ウィング4Fの壁面に、本学洋画専攻准教授、福士朋子先生の作品が設置されました。作品のタイトルは『Runway』。作品が展示された通路では通行中、非日常的な気分になれると評判でした。



10 堀 文子先生が描く楽園が、陶レリーフに

福島空港ターミナルビル1Fロビーに、本学名誉博士である堀文子先生の原画から制作された陶板レリーフの作品『ユートピア』が設置されました。原画は福島の自然のなかで育まれる命の楽しい集い「楽園」をイメージしたもの。それをもとに、高さ5.5m、幅4.5mの陶板レリーフが制作されました。堀先生自らが工房に行き、色や造形を監修。583個もの陶板ピースからなる作品が完成しました。

15 女子美にリケジョ？優秀研究発表賞をダブル受賞

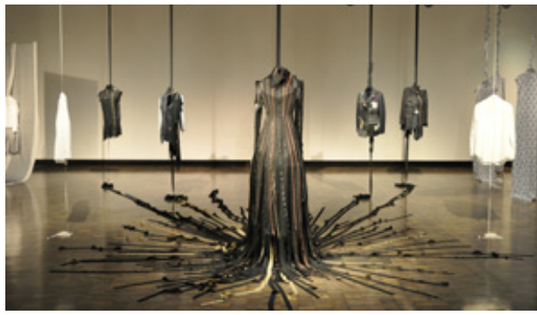
大学院博士課程2年の中島由貴さん（左）と、修士課程1年の畠山里枝さん（右）のおふたりが、2013年開催された一般社団法人照明学会主催、東京支部大会で優秀研究発表賞を受賞しました。ふたりはともに色彩学専攻。アプローチは異なりますが、いずれも美術館での鑑賞者の意識と照明の関係に注目した研究を進めています。「照明が人間に及ぼす効果や影響が美術作品鑑賞という環境を通して、わかりやすく伝わる」と高評価、両名受賞という快挙につながりました。

14 なにかが始まろうとする瞬間をとらえて、作品に

2011年、本学大学院修士課程洋画研究領域修了生、大小島真木さんの作品『Paradigm shift/パラダイムシフト』が「VOCA展2014」でVOCA奨励賞を受賞しました。大小島さんは2009年にトーキョーワンダーウォール賞を受賞後、世界を舞台に活動。2013年にはインドで開催されたウォールアートフェスティバルにて壁画を制作、その作品と活動は注目を集めています。

13 美術家会田誠さん来校！

絵画作品にとどまらず幅広い作品を発表している美術家会田誠さんによる特別講義が12月9日に洋画専攻研究室主催で開講されました。自身の作品への解説や想い、昨年行われた個展を巡るお話、学生への具体的なアドバイスなど、学生たちは目を輝かせながら熱心に聴講しました。



平成25年度 女子美術大学 女子美術大学短期大学部 退職教員記念展

JAM 展覧会報告　PICK UP

2014/1/6(月) → 2/3(月)

「女子美術大学 女子美術大学短期大学部退職教員記念展」では、平成25年度に退職される小倉文子先生、柏原花子先生、津田裕子先生、広瀬きよみ先生、渡辺治美先生の作品を紹介しました。作家として創作活動に携わるだけでなく、長年にわたり教員として後進の育成に取り組んできた先生方の幅広い活動の一端をご紹介し、たくさんの方にご覧いただくことができました。今年度は特に、布、塑像、ブロンズ、石などの立体的な作品が多く、会場は華やかで、かつ圧倒的な迫力に満たされていました。本展を通して出品者の創作活動の軌跡を顕彰することができたと思います。

展覧会報告

JAM

平成25年度
女子美術大学大学院 修了制作作品展

3/12(水) → 3/20(木)
※女子美ガレリアニケと同時開催

平成25年度に本学大学院美術研究科を修了する33名の作品を展示。修了生のポートフォリオのコーナーや、一般公開イベント「公開講評会 キュレーターの眼 2014」の開催を通して、修了生が社会とつながる機会を設けました。

女子美ガレリアニケ

女子美術大学AP(アートプロデュース表現領域)卒業制作(南嶌ゼミ+日沼ゼミ)プレ展示
AP Theater 2014 ーAP劇場2014ー

1/9(木) → 1/15(水)

本学AP表現領域4年生の卒業制作をプレ展示。女子美ガレリアニケの他、4つの教室が会場となり作品で彩られました。

第二回 百年丹青縁展　日中国際交流書画展
女子美術大学・上海交通大学

1/17(金) → 2/7(金)

女子美術大学と上海交通大学の教員の作品を展示。作品表現の多様性やその魅力を紹介しました。

平成25年度　女子美アート・セミナー通年講座 作品展

2/18(火) → 2/22(土)　前期　日本画／デッサン／クロッキー／銅版画リトグラフ
2/25(火) → 3/1(土)　後期　ボタニカルアート／日本伝統染色

女子美アート・セミナー通年講座受講生と指導講師の作品を展示。熱意溢れる作品で賑やかな会場となりました。

平成25年度　女子美術大学大学院 修了制作作品展

3/12(水) → 3/20(木)
※JAMと同時開催

平成25年度大学院美術研究科メディアアート造形、ヒーリング造形、ファッション造形修了生による作品展示を行いました。

歴史資料展示室

平成25年度収蔵資料展　収蔵資料にみる女子美の歩み
〜私立女子美術学校開校時に設置された学科を中心に〜

9/11(水) → 3/16(日)

収蔵資料により大学史を紹介するとともに、明治34年(1901)の本学開校時に設置された学科の歴史資料や卒業生作品を紹介しました。

展覧会予告

JAM

4/6(日) → 6/8(日)

高田喜佐　ザ・シューズ展

高田喜佐(1941-2006)が41年間に世に送り出した靴は、彼女の生き方そのものといえます。「靴はファンタジー」を実践してきた高田喜佐のクリエイションの軌跡と多彩なライフスタイルを、靴・デザイン画などで紹介します。

6/18(水) → 8/3(日)

II+
女子美術大学デザイン・工芸学科
ヴィジュアルデザイン専攻専任教員作品展

本学芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻の専任教員と客員教授による研究成果を「II+」の表現として紹介します。

女子美ガレリアニケ

4/6(日) → 5/9(金)　※4月6日(日)、20日(日)特別開廊

羽山まり子 展

本学卒業生の若手現代作家である羽山まり子によるインスタレーション作品を紹介します。

5/23(金) → 6/25(水)

女子美術大学美術館収蔵名品展

本学美術館の収蔵品の中から女子美出身の著名作家による作品を紹介します。

7/4(金) → 8/6(水)　※7月20日(日)、7月21日(月・祝)特別開廊

女子美術大学短期大学部 I年前期 基礎造形展

本学短期大学部I年次の自由選択授業で制作された学生作品を展示します。

歴史資料展示室

4/4(金) → 7/21(月・祝)
※4月6日(日)、7月20日(日)、7月21日(月・祝)は特別開室

横井玉子・藤田文蔵と
私立女子美術学校創立展

明治33年(1900)に本学創立を成し遂げた教育者の横井玉子と彫刻家で教育者の藤田文蔵の生涯と功績を歴史資料や作品を通じて紹介します。

女子美術大学広報誌

発　　行　学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集　総務企画部広報グループ
監修担当　浅野正博・林規章
デザイン協力　株式会社 Kitchen Sink.
印　　刷　株式会社 ヒーローズ
発行日　2014年4月4日

©2014 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ
TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL http://www.joshibi.ac.jp